朝の法話　第十六回　十月十一日

全校のみなさん、おはようございます。

昨日は合唱コンクールが行われました。合唱コンクールに至るまでの苦労や、本番での緊張もあったかと思いますが、どのクラスもステージで堂々と合唱を発表することができました。

合唱もそうですが、何かをするために人間が複数人集まって、みんなで足並みを揃えることは簡単なことではありません。人はそれぞれ持っている考え方や性格も違いますし、できること、できないことなどの能力の違いもあります。物事に向かう気持ちの強さや大きさの違いが気になることもあります。

こう考えると、人間がみんなでぴったり心をひとつにするというのは、とても難しいことのように思います。その難しいことを実現しようとすれば、自ずとそこに無理が生じます。誰かが強制して縛り付けて統一してしまうか、自分を見失うほど一つのことを強く信じるか、もしくは思考停止して何も考えないか、違ったものを排除してしまうか、という方法の他にありません。

このような人間や社会の在り方について、仏教ではどのように説くのでしょうか。かつて、東本願寺では「バラバラでいっしょ」というスローガンを掲げていました。違ったものが、違ったままでそれぞれが生き生きと共存する世界、それを仏教では「浄土」と表すのです。

親鸞聖人の書かれた「和讃」という歌の中に、次のようなものがあります。

「清風宝樹をふくときは　いつつの音声いだしつつ
宮商和して自然なり　清浄勲を礼すべし」

ここでは浄土の世界に流れている音楽が表現されていて、この中の「宮」「商」というのは中国の音楽の音程を表わす言葉です。西洋音楽でいうところの「ド」と「レ」の音に当たります。

普通、「ド」と「レ」の音を同時に鳴らすと、お互いがぶつかり合った響きの悪い音、いわゆる不協和音になります。そのような、普通なら交じり合わないはずの音がきれいに響き合う世界が「浄土」なのだと表現されているのです。

平田オリザという方に『わかりあえないことから』というタイトルの本があります。人間はもともとお互い違う存在で、その違ったものが違ったまま、違う者同士、わかりあえない者同士、という認識から、本当の人間関係が始まる、と筆者は言います。「多様性」というものを考えていく大事なヒントがこれらにあるように思います。